



『ご飯が食べられなくなったら、どうしますか？』
永源寺の地域まるごとケア

- 農山漁村文化協会
- 花戸貴司 著
- 国森康弘 写真
- 定価1,800円+税

地域まるごとケアと 看取りの文化の記録

タ

イトルを目にした読者はどんな印象を受け取るだろうか。これはむしろ反語的で、じつは「人生の終幕を、家族に囲まれながら過ごしませんか。地域一丸となってお手伝いをしますよ」というメッセージが、本書には満ちている。語り口は柔らかだし、寄り添う姿勢が全編に刻まれているのだが、この反語的な問いは「人生最期の主役は医療ではない、皆さん自身だ」という揺らぎのない信念の謂いでもある。

もう一つの見どころ。写真家・国森康弘氏の作品との強力なコラボレーションになっていること。国森さんは、花戸医師が訪問する東近江市永源寺地区の皆さんの、いのちと老いとその暮らしとを、まっすぐに見つめている。モノクロ写真に特有の情感をフルに発揮しながら、生まれたばかりの赤ちゃんから息を引き取ったばかりのお年寄りまで、

余すところなく写し出していく。

そして「永源寺の地域まるごとケア」というサブタイトル。なぜ地域包括ケアではなく、地域まるごとケアなのか。推測するに、今やさかんに喧伝される地域包括ケアシステムを、すでに15年も前から工夫を重ねながら地道に作り上げてきた、という著者の自信と自負が、じつはひそかに込められている。その1例。永源寺地区では毎年60名ほどの方が亡くなるという。現在、著者が看取る方々はそのうちの半数。診療所に赴任した最初の年はゼロだった。訪問を重ねながら、毎日毎日、「食べられなくなったら……」と訊ね続けてここに至った。「10年はかかりましたね」という医師の言葉もお伝えしておこう。本書はその10年の記録である。

評|| 佐藤幹夫(フリージャーナリスト)

少

し前に聞いた人の名前が出て来ない。予定をダブルブッキングした。60歳を過ぎた著者は、当初は「加齢によるミス」と思っていたが、不安になって病院に駆け込んだら……。

「軽度認知障害」と診断された著者の「闘い」が始まる。記者の仕事が続けながら、正確な診断を求める一方、認知力アップに向けたトレーニングに通い、病状の進行を食い止めるあらゆる努力を傾けた。本書は、およそ1年に及んだその活動記録である。

トレーニングは知能テスト、体力テストに始まり、料理教室、楽器演奏、遠足に至るまで、脳を刺激するあらゆる試みが行われる。どれもが具体的に克明に描かれており、読者は手に取るように状況を理解できる。なかでも、鍛える筋肉に神経を集中させて行う「山本式筋力トレーニング」は著者には効果的だったようで、写真で説明しながら紹介する。この筋トレを考案した山本氏は、「日ごろから感覚が鈍い人ほど、

「早期認知症」に挑むルポ



『ボケてたまるか!』

- 朝日新聞出版
- 山本朋史 著
- 定価1,200円+税

認知症になりやすい。健常者も筋トレをやった方がよい」と言う。予防が難しいといわれる認知症にも、効果的な方法がでてきているようだ。一方で、効果が実感できたトレーニングを行うその合間にも、症状が進んだらどうなるかという不安や焦りは付きまとう。そんな心情もユーモア交じりに余すところなく伝えており、早期とはいえ、本当に著者が認知症なのかどうかかわからなくなる。

本書は、「週刊朝日」に2014年4月から半年間にわたって掲載し、大きな反響を呼んだ体験ルポを加筆したもののルポをきっかけに11月に開かれた「認知症サミット」の関連イベントでオンラインスピーチを行った。

団塊の世代が一齐に後期高齢者になる「2025年問題」が注目され、なかでも、大きな課題になっているのが認知症だ。本書を参考に、今から自分の脳は自分で管理しようと思う。

評|| 原子